

伝道者の書11章1-6節 「分からなくても種蒔き」

1A 残される結果 1-3

1B とてつもない時間 1

2B 分け与える備え 2

3B 自然にある法則 3

2A 従順な種まき 4-6

1B 言い訳 4

2B 分からない中での種まき 5-6

本文

私たちの伝道者の書の学びは、8章まで来ています。そして今日、午後礼拝で9章から12章まで、最後まで読みます。今朝は、11章1-6節に注目したいと思います。

11:1 あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。11:2 あなたの受ける分を七人か八人に分けておけ。地上でどんなわざわいが起こるかあなたは知らないのだから。11:3 雲が雨で満ちると、それは地上に降り注ぐ。木が南風や北風で倒されると、その木は倒れた場所にそのままにある。11:4 風を警戒している人は種を蒔かない。雲を見ている者は刈り入れをしない。11:5 あなたは妊婦の胎内の骨々のことと同様、風の道がどのようなものかを知らない。そのように、あなたはいつさいを行なわれる神のみわざを知らない。11:6 朝のうちにあなたの種を蒔け。夕方も手を放してはいけない。あなたは、あれか、これか、どこで成功するのか、知らないからだ。二つとも同じようにうまくいくかもわからない。

ソロモンは、この伝道者の書において、何度となく「日の下で起こることは、私たちには見きわめることができない。」ということをお教えさとしています。私たちは、これこそ生きる道だと思って行っていることがあっても、「時と機会」というものに出くわし、神ご自身がしていることであることを話しています。ですから、私たちは自分では悟ることができずとも、日々与えられた事柄に忠実でありなさい、自分では分からないけれども、必ず結果が出る、と励ましているのが、今、読んだ箇所です。

1A 残される結果 1-3

1B とてつもない時間 1

11:1 あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。

随分と極端な譬えです。パンを水の上に投げたら、確実に無くなってしまいます。しかし、実はずっと後の日になって、その途方もない年月の後に、残っているのだよという譬えです。これは、「大海の一滴」という諺にも通じるものがあるでしょう。しかし、その一滴が何らかの変化をもたらして

いるのだ、ということがここでの考えです。

私はこの譬えを読んで、東日本大震災の津波のことを思い出しました。東北の海岸沿いにあった舟が、津波で押し流されて、長い月日を経てアメリカの西海岸に漂着するという出来事です。調べましたら、2014年、つまり三年後にワシントン州の海岸に舟が漂着しているニュースを読むことができました。いわゆる、漁師が一人で乗るような小さな舟です。これが、まさか 6500 キロメートル離れているアメリカの西海岸に漂着するなど、誰が想像できたでしょうか。

しかし、これは事実なのです。どんなに小さな働きであっても、それが長い年月をかけて、結果を生み出すというのは、霊的な原則として正しいのです。ある記事で面白い物を見つけました。テレビで「爆笑問題」というのがあるらしいです。それで、田中と太田の漫才の中で、こんなやりとりがあったそうです。

田中「最近の若者言葉だけど、すごい何でも神になっちゃうからね」

太田「本当に、大げさだよな」

田中「こないだなんか、『このラーメン超おいしい！このラーメン神だよ』とか言ってたからね」

太田「人でなくて、ラーメンまで神はないだろう！」

田中「もう、何だって、すごければ、神になっちゃうんだから」

太田（若い女性を演じて）「この本、超おもしろーい！この本書いた人って、神だよー」

田中「何の本読んでるの？」

太田「えっ、これ聖書」

田中（一瞬間をおいて）「それ、神でいいでしょう」（お客さん爆笑）

太田「まあ、ほぼ正解だけどね・・・」

こんな普通一般の人々の漫才であっても、聖書は人の書いたものではなく、神の書いたものだという認識があるからこそ、それで爆笑になったのでしょう、ということです。つまり、これは明治時代以降、宣教師たちが忍耐をもって伝えてきた福音、その証しがあるからこそ、一般社会に聖書は神の言葉という社会的な認知があるのだ、ということを書いていました。いかがでしょうか？。こうした歴代の日本におけるクリスチャンたちが、福音を伝え、聖書を教えていく中で、それで人々の心に、聖書は神から来ているという何となくですが、思いが与えられているということです。

2B 分け与える備え 2

11:2 あなたの受ける分を七人か八人に分けておけ。地上でどんなわざわいが起こるかあなたは知らないのだから。

これは、自分に与えられたものを、自分が救われるために蓄えるのではなく、むしろ分け合っ

いきなさいという教えです。そして、分け合うことによって、将来、災いが起こった時に、その受け取った人々が自分を助けてくれるかもしれないという内容です。私たち日本人は、貯蓄という概念が強くて、投資をしないという問題があるということはよく言われていますね。経済というのは、血流みたいなもので、お金が動いているから生きているのですが、日本人はたんず貯金のようなことをしているから、経済が良くなれないというような会話をよくします。

しかし、自分で溜めるよりも、他の人々に分け与えることによって、それが自分を救うという考えはとても大切です。必ず与えれば、受けるのだという原則が働いているからです。これを霊的にもそうなのだと教えられたのが主ご自身です。不正の管理人の警えです。不正を行った管理人は、主人に解雇させられます。その前に彼はくびになった後の就職先を心配しました。それで債務者のところに行きました。その証文の額を安くしたのです。こうやって不正に不正を重ねたのですが、主人はむしろ、その抜け目なさをほめたと言っています。なぜなら、彼は恩義を売って、解雇させられた後にそこに雇ってもらうことができるようにしたからです。そしてイエス様は言われます。「ルカ 16:9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」

私たちが、自分の命を惜しまずに主ご自身に捧げる、そして主に仕え、他の人々に分け与える。自分の手もとには、自分のものが残っていない。こうした生活は、必ず永遠の御国に私たちを導き入れ、報いを受けるようにしてくれるのです。

3B 自然にある法則 3

11:3 雲が雨で満ちると、それは地上に降り注ぐ。木が南風や北風で倒されると、その木は倒れた場所にそのままにある。

雲があれば、雨になって地に降り注ぎます。そして木が倒れると、その木はそのまま残っています。つまり、自然現象の中で一度起こったことは、そのまま残っているのであるから、私たちが主に対して行なったことも、そのまま残っているのだよ、ということです。自分が何かを作りだそうというのは、水のように流れ去っていきますが、主のために行っているものは、必ず残るのです。

2A 従順な種まき 4-6

1B 言い訳 4

そこで4節が、私たちに対する戒めになっています。11:4 風を警戒している人は種を蒔かない。雲を見ている者は刈り入れをしない。

種を蒔いても風が吹いて吹き飛ばしてしまうのではないかと、憂慮して、それで種を蒔かないとします。また、雲が出てきたので雨が降ってくるかもしれないと心配して、それで刈り入れをしません。しかし、どうして風が吹くと言えるのでしょうか。雨が降ると言えるのでしょうか？自分で勝手に判

断してし、用心深くなっているつもりでいて、1-3 節で話している、「主にあってしていることは、必ず結果が出る。」という原則を無視してしまっているということです。

物事はどのようになるのか分からないのにも関わらず、自分でこうだと判断して、それですべきことをやめてしまうことは、しばしば起こります。しかし、私たちは危険があるからといって、それをやめてはいません。交通事故で亡くなる人は毎年、必ず出てきます。だからといって、車の運転をやめることはありません。海外旅行に行けば必ず、何か事故に巻き込まれる危険があります。けれども、多くの旅行客がこの日本に訪れます。

私たちはイスラエル旅行に、来年行きますが、行けなくなる人の中で多い理由が、「イスラエルは危険だ」という人が家族にいるので、反対されていけないということです。しかし、イスラエルには毎年、350 万人ぐらゐは旅行客として来ていますが、テロ事件による死者はゼロです。ニュースで、エジプトで爆破テロが起こったと聞いたら、なぜかそれがイスラエルでも起こっていると思っています。また、「いつか行く」という言葉も多いですね。何か雲が見えたらやめておこう、と思っていますので、それで決断できないのです。皆さんもよくご存知の牧師さんは、はっきりと、「信仰がないだけですよ。」と仰っていました。このように、全てのことには危険が伴っていますが、それでそのことをしないというのは、愚かなことなのです。

私たちは、風が吹いてきた、雲が出てきた、だからやめようというあきらめをしばしば行なってしまいます。しかし、それであきらめたら、確かに出てくるものがなくなるので、確実に結果は望めません。けれども、あきらめずに行ない続ければ、何らかの結果が出ます。その典型は、伝道です。伝道をしていて、私たちは「この人は、語ってもどうも無理そうだな。」と判断して、それ以上、その人に働きかけるのをあきらめてしまいます。ところが、ほぼあきらめていたような人が、実は、後にイエス様を信じていたということは十分に起こり得るし、しばしば耳にすることなのです。

私たちが救われて、その前に救われることを予測できた人はどれだけいるでしょうか？私が思うのに、両親は無宗教で、キリスト教とは無縁でしたから、救われるという可能性は見えませんでした。ところが、「能力によらず、権勢によらず、わたしの霊によってと、万軍の主は言われる。」というゼカリヤ書の預言がそのまま実現したことを、私は目撃しました。というか、私自身救われると思っていた人はおそらくほとんどいなかったのではないかと思います。救われた後も、後ずさりしたことがあって、ずっと後になってバプテスマを授けた牧師さんにたまたま会って、「もう、だめだと思っています。」と正直に言われました。イエス様は、「あとの者が先になることが多い。(マタイ 19:30)」と言われましたが、実際にそうなのです。

そして、私は何度も、海外のクリスチャンから「日本は難しい宣教地ですね。」と言われて、その理由を尋ねられました。その時にいささか不快に思いました。だって、私自身がその難しさの中で救われた証人なのですから。神に不可能なことはないという、証しなのですから。日本の宣教は難

しいと言って、雲が来た、風が吹いてきたというような、言い訳を言ってそれで、しっかりと種まけば出てくるであろう実を、確実に結ばせなくさせてしまう、その決断をしてしまうのです。

そして、私たちは自分の肉の弱さに対しても、あきらめてしまうことがあります。何度となく試したけれども、どうしても克服することのできない自分の弱さがあります。それで、主に命じられることがあっても、「それは結局ね、こういう性格があって、今の置かれている状況があって、それでできないのですよ。」とあきらめてしまうのです。しかし、「御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。(ガラテヤ 6:8)」という約束があります。ですから、あきらめてはいけません。

ベテスダの池にいた男のことを思い出します。彼は 38 年もの間、足が利かなくなっていました。それでイエス様が尋ねられました。「よくなりませんか。」すると男は答えました。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中にも私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りているのです。(ヨハネ 5:7)」このようにして、イエス様の質問に彼は答えませんでした。自分が良くなることのできない、その言い訳をずっと言っていたのです。ところが、イエス様が「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」と言われました。それで足は直ったのです。したがって、御霊のために種を蒔いてください。御言葉によって養われてください。必ず、主の命令に従うことができるようになります。

私たちがしばしば行なう、「それはできません。」という言い訳は、できないのではなくて、行なわないという不従順であることが多いです。福音をすべての被造物に宣べ伝えなさいと言われたのは、主ご自身です。その命令は、難しい状況に左右されないのです。私たちはしばしば、主ご自身の命令は、自分が結果をもたらさないとと思っているから、不可能だと思ってしまうのです。私たちは結果を生み出す責任を持っていません。ですから、ただその命令に従順であればよいのです。その従順は、全く自由にされています。ある国においては、宗教の自由が全く与えられていないところもあります。けれども、語るということについては、神に従順になることについては、自由にされています。

そのように考えると、私たちはものすごく自由になれます。今までは、環境が揃わないということで、それで「これはできない」と考えていました。しかし、主が命じられることであれば、それに従いますという姿勢でいれば、環境が整っても、そうでなくても、その命じられたことをすることができるのです。自分の悟りで、自分自身を縛っていることはないでしょうか？自分は、これではだめだということで、「できない」ということで縛ってはいませんか？私たちは主にあって自由なのです。

2B 分からない中での種まき 5-6

11:5 あなたは妊婦の胎内の骨々のことと同様、風の道がどのようなものかを知らない。そのように、あなたはいつさいを行なわれる神のみわざを知らない。11:6 朝のうちにあなたの種を蒔け。

夕方も手を放してはいけない。あなたは、あれか、これか、どこで成功するのか、知らないからだ。二つとも同じようにうまくいかもわからない。

5 節に、これまで話されていたことの集約があります。お母さんのおなかの中で、胎児がどのようにその骨が形成されるのか、私たちには分からないのです。同じように、どのように主が結果をもたらすのかは、私たちには分からないのです。ですから、種を蒔きます。しっかりと蒔きます。時が良くても悪くても蒔きます。そうすれば、主が聖霊によってその後の責任を取ってくださいます。その種が、何日も後になって、自分が全く知らない形で実を結んでいるのかもしれないのです。主が戻って来られて、「ええ？私、そんなことやりましたか？」と言われるようなことで、主から報いを受けることがあるでしょう。「ガラテヤ 6:9 善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。」